



秋季大祭を締め括った「高宮神奈備祭」(3日)

# 宗像

## 11月祭事暦

毎月1・15日 <sup>つきなみ</sup> 月次祭

午前10時  
高宮祭  
第二宮・第三宮祭  
引き続き  
宗像護国神社  
月命日祭(1日)  
巡 拜(15日)

午前11時～  
総社祭  
浦安舞奉奏(1日)  
豊栄舞奉奏(15日)

3日 明治祭

午前10時～

23日 新嘗祭

午前11時～

# 秋季大祭斎行

一日のみあれ祭から始まり三日間斎行された秋季大祭は、連日晴天に恵まれ平日にもかかわらず多数の参拜者で大いに賑わいをみせ、高宮神奈備祭が厳かに斎行されたのち幕を閉じた。

十月一日

### 「みあれ祭」

朝方、薄雲で覆われた天気のため午前八時三〇分中津宮(大島)で、奉賛会・神輿奉仕者・御座船々長・一般参列者など多くの方々に見守られるなか出御祭が斎行された。先の神迎え神事に中津宮本殿に奉安されていた沖津宮御神璽と中津宮御神璽をそれぞれの神輿に



高宮で祝詞を奉読する宮司(3日)



「日本人の心の故郷」

来る平成二十五年、宗像三神の親神様にあられます皇祖・天照大御神を主祭神としてお祀り申し上げる、伊勢の神宮に於て我が国挙げての一大事業である第六十二回神宮式年遷宮を迎える▼この式年遷宮は天武朝の御代に制度化され、そして先帝の遺志を継ぐ形で持統朝の御代始めに斎行されたといわれ、二十年に一度、皇大神宮・豊受大神宮の両御正殿を始め諸殿舎、御装束、神宝にいたるまで、すべてを古式のままに新しく造り替え、御祭神に新宮へお遷りいただく重儀であり、神宮が「古くて、新しいお宮」と云われる所以であろう▼神道は、結びと生みの信仰だと言われる。祭により神と人を結び、それにより神も人も新しい力を得、若々しく生まれ変わる。蘇り、即ち御生れ(みあれ)こそが神道の神髄といえる▼神宮の遷宮を迎えることにより、日本人は日本人らしさを取戻し、国家・皇室の永久の弥栄を約束される▼古代連綿と受け継がれてきた日本精神・伝統文化・美術・工芸・建築それらすべてを二十年のサイクルで永遠に後世へ伝えていくこの祭儀の重大性を強く感じずにはいられない。遷宮により、我が国が戦後失いつつあるアイデンティティーが確立され、真の「戦後レジームからの脱却」になることを期待したい。

(N・M)

神具・装束 結婚式場調度品

福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31  
電話 福岡(092)651-9456番

本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入  
電話 (075)341-3341(代)～4番  
(075)343-3341番

木組の家 匠の技

総合建築業 株式会社 弘江組

〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567

奉安し、大島小学校鼓笛隊の先導のもと『波切り御幣』・『紅白の吹流し』・『大漁旗』で飾られた約三〇〇隻の漁船の待つ大島港までの陸上神幸が行われた。

一方その頃、辺津宮(宗像市田島)では午前九時に出御祭を終えた辺津宮御神璽が、神輿に奉安されて神湊港に向かわれていた。



海上神幸「みあれ祭」

沖・中両宮の神輿を御座船に載せ終わると午前九時三〇分に、先導船を先頭に御座船、供奉船と約三〇〇隻が順を追って出港し、辺津宮御座船が待つ神湊へ大船団となり向かった。約三〇〇隻の海上神幸は、年に一度の宗像三女神再会の無事を祈る人々の思いの賜なのか、風の玄界灘を壮麗に進み、上空を舞う数機の取材ヘ

リコプターからはさぞかし雄大な眺めになったに違いない。神湊港への入港間近、海上にて一年振りにお揃いになられた女神達三隻の御座船は停泊し、供奉してきた船々が女神達の再会を祝福するかのように順次御座船を一周し母港へ帰っていった。また丁度この時、薄雲で覆われていた空から日が差し込

み始め晴天のなか御座船は神湊港に到着した。

船から降ろされた三基の神輿はいつたん玄海魚市場に奉安され、奉仕員に担がれて神湊の海を見渡す高台にある頓宮まで陸上神幸し、頓宮祭を齋行、御座船奉仕者には感謝状と記念品が贈呈された。その後、三宮の御神璽を載せた三台の御座車は宗像警察署白バイ・パトカー、宗像交通安全協会広報車、消防自動車に先導されて辺津宮まで神幸。正午頃、本殿へ入御され秋季大祭一日祭を齋行、宮司祝詞奏



神輿を先導する大島小学校鼓笛隊

上の後に保存会々員による主基地方風俗舞が厳かに舞われ、神前に奉納した。

十月二日

「二日祭」

二日午前八時からは流鏝馬神事が宮木貞彦氏らにより奉納された。射手が烏帽子と直垂姿に威儀を正し本殿での命名式の後、人馬共に祓いを受け神門前に設けられた馬場道を三頭が疾走。地上七メートルの的に狙いを定めて矢を射ると拝観者からは盛んな拍手が起こっていた。

午前十一時、宗像支部神職奉幣使・宮地嶽神社献幣使・鎮國寺住職にも参向いただき二日祭が齋行され、福岡市の喜多流(梅津忠弘氏門下)社中の奉仕により、謡や能管・鼓の



大船団が近づき神湊港を出港する辺津宮御座船



神湊港に近づき三隻の御座船をまわる各船



初宮祭



入御される三宮の御神輿



流鏝馬神事



高宮神奈備祭



今年も参拝された吉村作治サイバ一大学学長

十月三日

「三日祭」

三日は午前十一時から三日

鳴り物に合わせ「翁舞」が神前に奉納された。この舞を見ようと詰掛けた多くの参拝者は、風雅な舞にしばし見入っていた。またこの二日祭では、氏子会より奉幣詞奏上も行われた。

祭が斎行され、地元玄海中学校の女子生徒四名による「浦安の舞」が奉納。正装に身を包んだ生徒達は緊張した面持ちだったが、舞い始めると学校帰りの練習の成果が十分に表れ、その姿は大人びてしなやかな舞は参拝者を魅了した。

この三日祭終了後には、高宮・第二宮・第三宮・宗像護国神社に奉仕神職、参列者がそ

「高宮神奈備祭」

午後六時、秋季大祭を締め

れぞれ分かれ秋季大祭が執り行われた。また、午後二時から拝殿にて南坊流瀧口社中による献茶祭が奉仕され、門下生が見守るなか瀧口宗芳氏によるお点前が披露され、点てられたお茶は神前へ供えられた。

括る高宮神奈備祭が斎行された。この祭典は再会された宗像女神に秋季大祭の無事斎行を感謝するとともに、更なる

神威の無窮を祈念する祭典である。

夕闇の定刻、斎館前から太宰府天満宮神職と当社の神職



が奏でる雅楽に先導され官司以下奉仕者が列を成し、足下を氏子青年会々員の方々にて提燈で照らして頂きながら高宮まで参進。高宮に到着したころ辺りはすっかり暗闇に包まれ、松明、提燈の明かりだけが燈された祭場は古代祭祀を窺わせ、その場にいた総ての人はその厳かさに身の引締まる思いであつただろう。そんな



浦安舞



主基地方風俗舞

中、官司祝詞奏上、古歌奉唱、天満宮巫女による『悠久の舞』が奉奏され、一同感動した様子であつた。悠久の舞は大祭



悠久舞



氏子奉幣使は宗像市三郎丸の花田義男氏

を締め括るに相応しい見事な舞となり、滞る事無く秋季大祭が終了した。

各奉仕者は下記の通り

◆海上神幸、奉仕船◆

- 沖津宮御座船  
荒神丸 (鐘崎漁港・岩瀬健次)
- 中津宮御座船  
沖津丸 (宗像漁協大島支所・沖西豊幸)
- 辺津宮御座船  
健栄丸 (宗像漁協神湊支所・三苦健二)
- 沖津宮先導船  
第二健栄丸 (宗像漁協神湊支所・三苦英了)
- 中津宮先導船  
千寿丸 (宗像漁協福間支所・廣渡 均)
- 花火船  
第三海漁丸 (宗像漁協大島支所・沖西一宏)
- 報道船  
みたけ (宗像漁協大島支所船)

◆陸上神幸、奉仕車◆

- 御座車  
(株)新出光/西久大運輸倉庫(株)  
宗像地区タクシー協会(みなとタクシー(株))
- 先導車  
宗像観光協会/宗像地区交通安全協会  
宗像市消防団第十一分団
- 供奉車  
宗像市消防団第十二分団  
玄海ホテル旅館組合

◆主基地方風俗舞奉仕者◆

- 舞方…清水陽介・深田龍介・福崎武志・岩佐恭行  
歌方…石津典秀・中野修・吉田敏幸・岩佐洋一・中野正徳

◆氏子会奉幣使◆

- 花田義男(宗像市三郎丸)

◆流鏝馬射手奉仕者◆

- 古川師・木稲修一・木稲貴史

◆浦安の舞奉仕者◆

- 権田汐里・添田葵・朝長郁美・松尾彩菜

# 表千家奉仕献茶祭斎行

十月十七日、錦秋の一日を彩る恒例の献茶祭が斎行され、県内はもとより山口・九州各県の同門会員をはじめ日々茶道に勤しむ人々が参集し、和服姿の女性達で神苑は終日

華やかな雰囲気が漂った。献茶とは崇敬の心をもつて、神仏にお茶をお供えする儀式であり、神郡宗像においても神前に茶を供える献茶祭が催されてきたが、表千家々元直々による

献茶の儀は、昭和三十七年当時

の宗像大社復興期成会々々長出光佐三氏の御尽力により実現、第十三代表千家々元即中斎千宗左宗匠が初めて奉仕されて以来、毎年出光家の奉納により行なわれ、今回で四十四回目を迎える。祭典当日、早朝より爽快な秋晴れとなり、定刻十一時、一鼓を合図に当大社渡邊禰宜以下神職三名、荷水斎左海宗甫宗匠以下介添の家元関係者、出光興産株式会社名誉会長出

光昭介氏外関係者は祓舎にて修祓を受け本殿へ参進、所定の座に着座し祭典開始。斎主が茶道の興隆と「茶の聖・千利休」の正統を受け継ぎ、四百余年の伝統を誇る表千家の隆昌、同門会の繁栄を祈念する祝詞を

奏上、続いて献茶の儀が執り行われた。左海宗匠は拜殿に設けられた風炉前に端座、切柄杓の手許、袱紗さばきも鮮やかな「動と静」とが見事に調和した淀みない清らかな御点前が披露された。宗匠の御点前を拜見しようと拜殿周辺に詰め掛けた大勢の拝観者は、一挙手一投足を見逃すまいと、真剣な眼差しで宗匠の作法を見詰めていた。咳き一つない張り詰めた静寂に包まれ

る中、「金の椀に濃茶・銀の椀に薄茶」の二服が点てられ、雅楽の調べが流れる中、神職の手により御神前に奉献され、宗像大神の神慮をお慰め申し上げた。



家元の実弟左海宗匠による御点前



東京・出光美術館より運ばれた茶道具の逸品

光昭介氏外関係者は祓舎にて修祓を受け本殿へ参進、所定の座に着座し祭典開始。斎主が茶道の興隆と「茶の聖・千利休」の正統を受け継ぎ、四百余年の伝統を誇る表千家の隆昌、同門会の繁栄を祈念する祝詞を



儀式殿での「出光副席」



参列される出光昭介名誉会長

祭典後、参列者は儀式殿に設けられた「出光副席」、斎館に設けられた「同門会副席」へ参席、茶席に掲げられた掛軸・茶道具の逸品を觀賞しながら、お茶を戴き「侘・寂」の境地に浸り、至福の一刻を楽しんだ。

宗像市の梶山氏

# 脇差と槍を奉納

去る十月七日、当大社へ梶山幸雄氏所蔵の脇差一口と槍一口が奉納された。梶山氏は永く刀剣の愛好家で武器などを収集されていたが、平成十四年に他界。収集品を当大社へ納めたいというご本人のご遺志により、この度の奉納となった。

当日午前十時から辺津宮本殿で奉納式を斎行。梶山氏夫人の和子氏のほか、お孫さんまで含めて八名が参列した。祭典後、高向権宮司より感謝状



所存である。この度のご奉納、心より感謝申し上げます。

と記念品が贈呈され、最後に拝殿で記念の撮影。ご一家は皆、幸雄氏のご遺志実現に晴れやかな表情を浮かべた。

奉納の脇差は銘兼定で拵付、室町時代後期の美濃の脇差である。また、槍は無銘で、江戸時代後期の肥前の槍と伝える。共に、十月二十八日から当大社神宝館で開催中の「宗像大社刀剣展」に出品されている。当大社は奉納頂いた脇差、槍を大切に後世へ伝えていく

# 原 知遙氏神恩感謝祈願並び

## 「神代の女神」出版奉告祭

十月十四日、原知遙著「神代の女神」(柗梓書院発行)が発行され、その発刊イベントが当大社において開催された。

午前十一時三十分全国各地より発刊を祝う参加者約七十名が参集、正午より本殿において、発刊の奉告祭併せそれに伴う神恩感謝祈願祭が斎行された。書籍奉納・祝詞奏上・神楽奉奏に続き原知遙氏、また秩父今宮神社塩谷治子宮司が玉串を奉りて拝礼され、祭

典は滞り無く終了、引き続き本殿にて劉宏軍氏により六つの珍しい楽器を使い六曲の古楽が奉納されると参列者、また一般の参拝者も足を止めその音色に聴き入った。

祭典終了後、清明殿へと移動し式典並び昼食会が開かれると、参加者より発刊を祝う言葉が次々と交わされ和やかに会は終了となった。会食後、一行は高宮を参拝され、第二部のDJドラゴン・いしだ壱



「神代の女神」を執筆された原知遙氏

成による出版記念ライブ会場へと移動の為、当大社を後にした。

### 原 知遙

(株)夢大陸・福岡コミュニティ放送(株)代表取締役社長  
神社研究家の顔も持ちPC・携帯サイト「夢神社」にて日本の女神様を紹介中。

### 劉 宏軍

音楽監督・作曲家・笛演奏者映画「ラストエンペラー」で坂本龍一氏と共に作曲・演奏を担当



いしだ壱成さんも参拝されました



拝殿で演奏する劉宏軍氏

(続)

# 孫太郎の寄物

220

いしいただし



出帆して船は順調に走りつづけ、港を出てからかなりの日数がたった。そろそろ中国広東の山々も見えてくるので、マス

トに上つて遠望する。最初に山を見つけた者には、銀錢五文を与え、また数日して琉球(沖縄)の島影を見つけたら銀錢八文を与えた。これから日本の山が

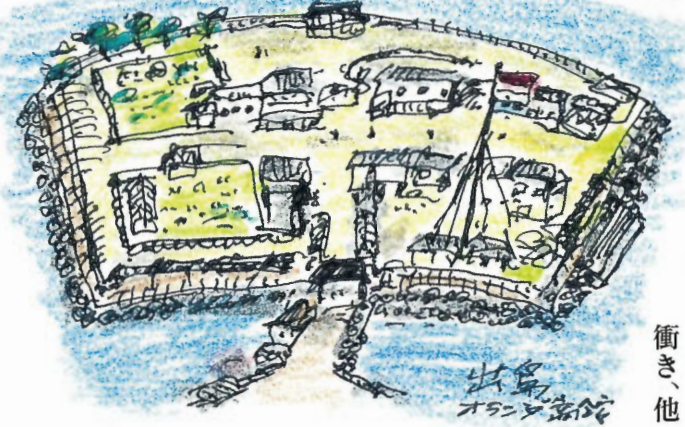
を見つけた者には、銀錢五文を与え、また数日して琉球(沖縄)の島影を見つけたら銀錢八文を与えた。これから日本の山が



能古島から見た糸島半島

太郎は東国方面ばかり船で行つているので、西国の方はあまり知らない。と答えた。カピタンは「そうだろうな」と笑った。

こうしてタ イコンカンの家を出てから、およそ六日にして長崎港の入口に着いた。高鉾島の南に至り、数回号砲を放ち、港に入る時も号砲三回放った。港に着いて、また号砲を放つて、碇をおろした。一行は出島の和蘭陀商館に入った。時に明和八年(二七七二)六月十六日であった。役人に検問され、桜街の牢屋に入れられた。同じく八月二一日、東都(江府)の御裁許(ごさいきょ)があつて、鎮台の御奉行夏目和泉守殿より、筑前の聞役興膳善大夫を招き、孫太郎は唐泊に帰ることが許可された。時に孫太郎二七歳であった。かの地からたずさえて来た物件の内、剣一口だけ長崎奉行にとりあげられ、そのほかはすべて与えられた。また孫太郎をつれてきた褒賞として、長崎奉行よりジャガタラ「ゼネアラ」に米五包(俵)、此節渡海のカピタンに三十包、船頭に二十包が与えられた。



両親の位牌に額衝き、他

孫太郎は長崎から駕籠で運ばれ、筑前・唐泊の家へたどり着いた。兄が一人家において、孫太郎を見て驚き、喜び、しばらく言葉が出ず、ただ茫然としていた。まがうなき、まことの弟であり、手を取つて、どうして今ここに帰ってきたのか、どんな国の果てまで行ったのか、今までどんな生活をしていたのか、なぜこんなに永い年月に、一度も音信しなかつたかを問われ、今までのことを話した。



孫太郎

孫太郎は佛壇の前へすすみ、両親の位牌に額衝き、他九人の事を思い出し暗涙した。その夜は兄と共に語り明かした。十九人の家族のことを尋ねると、両親が亡くなったところや、再婚した人、子どもをつれて、他家に再縁した人のことを聞いた。

「ほとんど昔のありさまはあらざれば、浦島太郎がふること、今更思ひ合はされて、うき世のはかなさぞ、かこたれにける。」(日本漂流譚)

# 第五五五回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日メ切

北九州市 八幡西区 吉田 ウト子

【評】 炎をあけて燃えつくる修羅もあるなら猛暑をせめぎ緋に咲くカンナ  
夕子を通じて今年暑さを詠っているが、二句の燃えくるがまず、口語のつぎに引かれてつくる  
の連体形にしたのが、「燃えくるの終止形か、またせめぎも同意語のうち二語はどうか。

福津市 若木台 野間 精一

【評】 教練の匍匐全進を思ひ出づ雄ひじわに硬き花穂の立てば  
「雄ひじわ」は雄日芝のこと書けば、学校で軍事教練を受けた世代には、  
直ぐ思い出させる風景である。暗い予感のする今、見落とし難い一首である。

福津市 中央 池浦 千鶴子

【評】 野ぶどうのあまた付きたる実の色にひかれて写す朝の道  
結句は体言止めでなく「朝の道を写しぬ」としたことの方が余情が  
出る。

宗像市 田久 巻 桔梗

【評】 み社と師らのささへそありがたき短歌大会の応募こそその数越す  
一般の部の応募作品数は昨年約一、五倍の二〇六首とか、事務  
局長ならでの喜びと、人格を表す謙虚さのにじむ作品である。

宗像市 光岡 森田 富佐子

【評】 赤とんぼ天気上々高く飛び群、輪になつて穂の上を舞う  
赤蜻蛉のさまをよく観察して詠っている。

宗像市 光岡 則松 芳子

【評】 青空に残された暑気そして花ギンナンの実とつくつく法師  
こちらは植物と生き物の名を列挙して季節の移りを詠っている。ただ  
花は何の花か、単に花と言えは桜の事を指すので注意して欲しい。

北九州市 戸畑区 田中 ハツセ

【評】 口付けを求むる様な朝顔の清しき花に顔を近づく  
朝顔の花を「口付けを求むるやうな」とした処が手柄。人柄が  
うかがえる一首。

福津市 星ヶ丘 佐々木 和彦

【評】 山鹿なる千人踊りを見そびれてまたもひと夏すぎてしまえり  
「またも」に込められた憧憬と甘美さ、ロマンチスト派らしい作者  
の歌である。

宗像市 南区 井田 有久衣

【評】 社務所にて白い作務衣の中学生「アルバイトなの」問えばうなずく  
孫のような中学生に注ぐ優しい眼差し、四句は「聞く」を示す「と」  
をいれて「アルバイトなの」と、とする。

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子

【評】 徳島の友より今年も送り来しスタダチの香る朝の食卓  
スタダチの香りからほのぼのと立ち上ってくる友の情愛を味わって  
欲しい。

宗像市 日里 大和 美由紀

【評】 九千部の山の靈気に生れし蝶もつれもつれて高く舞ひけり  
美しいつがいの蝶であったのだろう。だから「山の靈気」と表現した。結  
句は過去を表す「けり」でなく「舞ひゆく」と現在形にするのがいい。

うきは市 浮羽 向 則正

【評】 亡き父の戦死せるといふ中国の桂林に来て小石拾るき  
伝え聞きを表す「といふ」を生かすには上句を「我が知らぬ父が  
戦死せしといふ桂林に」としたらどうだろうか。

福岡市 中央 加野 志のぶ

【評】 彼岸回に合いたる友は九十と私の如き笑をたたえて  
人生の色んなものを見て来た九十歳の齢が生んだ仏のような笑い、われわれもこのよう  
になりたいものである。九十とは「九十歳」、「笑をたたえては笑みをたたえる」とする。

宗像市 田野 森 甲子

【評】 那覇空港爆発事故より無事脱出九十秒の時を尊し  
同じ九十でもこちらは僅か九十秒である。人の生命の大切さを  
切実に知る作者ならではの「時を尊し」である。

宗像市 形にいかにかかはるや  
魯山人の大皿何も語らず

筆太に色紙に魯山人書けり  
「生の持味」「品質即料理」

妻は風邪吾はぎっくり腰に臥し  
ひえびえとあり家具も書籍も



# 第五三〇回 俳句作品集

宗像市 日里 花田いつ枝  
昂りの神馬嘶く秋祭  
宗像市 東郷 田中 憲象  
荒立てて闇の神輿に神入るる

## 編集後記

秋の宗像大社といえは「菊まつり」です。西日本最大の菊花展で、境内中に約三千鉢の菊が出品されています。是非ご覧下さい。▼文化の秋、数ある神賑行事の中でも、菊花展に次いで歴史を有してきたのが、「献詠短歌大会」でした。しかし、諸般の事情により昨年三十五回を以って幕を閉じました。▼ところがその後、宗像の短歌愛好家を中心に「運営の全てを市民・愛好家ら実行委員会で行うので、継続させていただきたい」との申し出を受けました。その熱意に神社も動かされ、継続することを了承しました。▼そして今回集まった詠草の数は、神社運営時は一五〇首前後であったのに対し、小・中・高校生まで部門を拡げ、その数一、一八首。高校生は出品が特に多く、地元宗像高校による六四一首の出品は頼もしく思うと同時に、もっと早く一般の方に引き継ぐべきだったことを痛感しました。▼神社側が伝統文化護持の名の下に開催したものでなく、市民、愛好家自らが神前で開催を切望し、その運営にあたる真の意味での「第三十六回宗像大社短歌大会」が今月十日いよいよ開催されます。(M.O.)

発行所 宗像大社社務所

〒811-3505 福岡県宗像市田島  
電話 0940-62-1311(代)  
発行人 葦津幹之  
編集人 大塚宗延  
制作 ゼネラルアサヒ  
印刷 ゼネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円